

平成 20 年 8 月

外交史料館



外交史料館には、外交史料に関する質問が国内外から数多く寄せられます。その対象時期は幕末期から現在におよび、内容も政治・外交、経済、文化交流と多岐にわたります。

これらのご質問のなかから、多くの方々が関心を有しているのではないかとと思われるものを選び、回答とともに「外交史料Q & A」としてお送りしています。

今回は、「平成 20 年 8 月号」として、昨年度（平成 19 年 4 月～平成 20 年 3 月）に寄せられたご質問のなかから、16 問を選んでお届けいたします。

「外交史料Q & A」が外交史料館の活動の一端をお伝えし、今後一層外交史料館をご利用いただくためにも参考となれば幸いです。

幕末期

Question 1

日本とポルトガルが修好通商条約を締結したのはいつですか。

Answer

1860年8月3日（万延元年6月17日）です。

日本とポルトガルの国交は、江戸幕府のいわゆる鎖国政策により1639年（寛永16年）以来途絶えていましたが、オランダ領事の仲介もあって、1860年7月12日（万延元年5月24日）にポルトガル使節が来日し、条約締結を申し入れました。これをうけ、溝口直清ら全権がポルトガル側と折衝し、8月3日、外交機関の設置、開港地の指定、遊歩規程（外国人が自由に移動できる範囲の取り決め）など、全24条からなる日本とポルトガルとの修好通商条約（正式名称は「日本国葡萄牙国修好通商条約」）が調印されました。

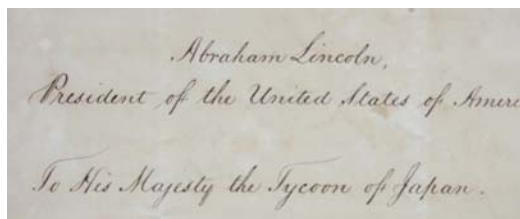
この条約書の原本は、史料編纂のため東京帝国大学史料編纂所に貸出中、1923年（大正12年）の関東大震災により焼失しました。しかし、条文と修好通商条約締結に至るまでの経緯は、外務省が1871年（明治4年）から約10年かけて編纂した幕末外交史料集『続通信全覧』に記されています。

Question 2

幕末の頃、アメリカの大統領から江戸幕府の将軍に送られた親書では、「将軍」のことを英文でどのように表記したのでしょうか。

Answer

「His Majesty the Tycoon of Japan」または、「His Imperial Majesty the Tycoon of Japan」と表記されています。外交史料館で所蔵するアメリカの大統領から江戸幕府の将軍に宛てた親書には、ハリス（Townsend Harris）初代領事の免官や、ハリスの後任としてプリューイン（Robert H. Pruyn）弁理公使の任命を伝えるリンカーン（Abraham Lincoln）大統領からの親書、ヴァルケンバーグ（Robert B. Van Valkenburgh）を弁理公使に任命するジョンソン（Andrew Johnson）大統領からの親書などがあります。なお「Tycoon」という言葉は、江戸幕府の将軍が外国に対して用いた「大君（たいくん）」の称号が由来であるといわれています。



リンカーン大統領親書（部分拡大）
「His Majesty the Tycoon of Japan」



ジョンソン大統領親書（部分拡大）
「His Imperial Majesty the Tycoon of Japan」

明治期

Question 3

岩倉遣欧使節団について調べています。どのような関係記録がありますか。

Answer

外務省記録「本邦人ノ外国訪問関係雑件 右大臣岩倉具視特命全権大使トシテ締盟各国へ派遣ノ件」があり、そのうちの主要な文書が『日本外交文書』第4巻（明治4年）、第5巻（明治5年）、第6巻（明治6年）に採録されています。

1871年12月（明治4年11月）、欧米の条約締結国との国交親善、不平等条約の改正交渉および文物・制度視察の任を負って、特命全権大使岩倉具視はじめ使節委員のほか、随行者、留学生を含めると総勢100名を超える一大使節団が横浜より出航しました。一行は国書を携えてアメリカ、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン＝ノルウェー、イタリア、オーストリア＝ハンガリー、スイスを歴訪し、各国の元首に謁見しました。その際受領した明治天皇宛国書も、外交史料館で所蔵しています。

1年10カ月にわたる長期の視察を終えて岩倉らが帰国したのは1873年（明治6年）9月13日のことでした。使節団は欧米文物の研究、随伴した留学生の活躍など多くの成果を残しました。



岩倉具視

Question 4

アメリカの南北戦争当時の北軍司令官で、後に第18代大統領になったグラント（Ulysses S. Grant）が、大統領引退後に来日した時の記録を探しています。

Answer

グラント来日関係の記録としては、外務省記録「外国人ノ来朝関係雑件 米国前大統領「グラント」来遊ノ件」があります。また、関係文書のうち主要なものは、『日本外交文書』第12巻（明治12年）に採録されています。

グラントは、1869年（明治2年）より1877年（明治10年）まで、2期にわたりアメリカ大統領を務めました。大統領在職中は、条約改正交渉のため渡米した岩倉使節団を手厚く接遇しています。

グラントは大統領引退後、家族を伴って世界漫遊旅行に出発し、イギリスをはじめヨーロッパ諸国、インド、タイ、清国を歴訪して日本に至りました。清国では李鴻章、恭親王（道光帝の息子）と会見し、当時日本と清国との間で懸案となっていた琉球帰属問題の調停を乞われています。

1879年（明治12年）7月3日横浜港に到着したグラントは、同年8月10日浜離宮で明治天皇と会談しました。この会談で、日本の国政について意見を求められたグラントは、民選議会設立の重要性や外債の早期解消の必要性を説き、琉球帰属問題については、日清両国の相互譲歩による平和的解決を求めました。

Question 5

1881 年（明治 14 年）にハワイ国王が来日したときの記録はありますか？

Answer

外務省記録「外国貴賓ノ来朝関係雑件 布哇、埃及、韓国、「アフガニスタン」之部」（布哇＝ハワイ、埃及＝エジプト）に、第 7 代ハワイ国王カラカウア（David Kalakaua）が訪日した際の関連記録が残されています。また、主要な関係文書が、『日本外交文書』第 14 巻（明治 14 年）に採録されています。

1881 年 3 月、カラカウアは世界各国巡遊の途次日本を訪問し、東京や横浜のほか、神戸、京都、長崎などを訪れました。明治政府は当初、カラカウアの訪問は身分を隠してのものであるとの報告を受けていましたが、明治政府にとって初めて迎える現職の外国君主であったこともあり、数度にわたる明治天皇との会談を設け、さらには菊花大綬章を贈呈するなど丁重に接遇しました。

外交史料館には、カラカウアの来日に至る経緯を示す文書や、滞在中の活動を記した記録、ハワイ王国から明治政府への謝意を伝える書簡や日本の関係者へ勲章が贈られたことを示す文書などが残されています。

Question 6

明治時代にトルコの船が和歌山沖で沈没した際、明治政府が負傷者をトルコまで送り届けたというのは本当ですか？

Answer

本当です。

1890 年（明治 23 年）9 月 16 日深夜、トルコからの特派公使として来日した海軍少将オスマン・パシャ（Osman Pasha）を乗せて帰航中のトルコ軍艦エルトゥールル号は、暴風雨に見舞われて和歌山県大島村（現在の串本町）沖で座礁・沈没し、オスマン・パシャを含む 600 名近くが犠牲となる大惨事となりました。事件の報に接した明治政府は、軍艦「八重山」を派遣して生存者の治療や遺体の回収・埋葬にあたらせ、同月 26 日には生存者（69 名）を軍艦「比叡」および「金剛」でトルコへ送り届けることを決定しました。

同年 10 月 11 日、両艦は神戸を出航し、エジプト（当時はトルコ領）のポートサイドにおいて生存者をトルコ側に引き渡しました。その後両艦は翌 1891 年（明治 24 年）1 月 1 日イスタンブールに到着、同地に 1 ヶ月余り滞在し、明治天皇宛の親書を受領して帰国しました。また、「八重山」派遣に功のあった 7 名がトルコ政府から勲章を授与されています。

エルトゥールル号遭難に関連する記録は、外務省記録「土耳其国特派公使「オスマンパシャ」同国皇帝陛下ノ親書並「イムチマツ」勲章捧呈ノ為謁見一件」（土耳其＝トルコ）や「外国勲章本邦人へ贈与雑件 土国之部」に収められています。

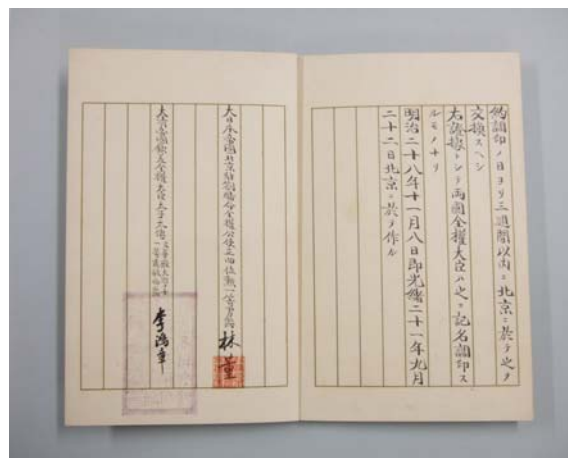
Question 7

日清戦争後の「三国干渉」に関する史料はありますか。

Answer

外務省記録「遼東半島還附一件 露、仏、独三国干渉」に含まれており、そのうち主要な文書は、『日本外交文書』第28巻（明治28年）第二冊に採録されています。

1895年（明治28年）4月17日に調印された日清講和条約（下関条約）には、遼東半島の日本への永久割譲に関する規定が盛り込まれていました。これに対してロシア・フランス・ドイツは、この割譲規定が「清国ノ都ヲ危フスルノミナラズ之ト同時ニ朝鮮国ノ独立ヲ有名無実トナス」ものであるとして、4月23日に遼東半島の還付を勧告しました。日本政府は5月4日、この勧告を受諾することを閣議決定し、これを受けて陸奥宗光外務大臣は、翌5日、在ロシア西徳二郎公使に宛てて「日本帝国政府ハ露仏独三国政府ノ友誼アル忠告ニ基キ奉天半島（注：遼東半島）ヲ永久ニ占領スルコトヲ放棄スルヲ約ス」旨の覚書をロシア側に提出するよう訓令しました。そして11月8日、日本は清国との間に遼東半島還付条約を結びました。



遼東半島還付条約（調印書）

大正期

Question 8

明治天皇の大喪儀に関する史料はありますか。また大喪儀に参列した各国の貴賓について教えてください。

Answer

外務省記録「明治天皇崩御一件」には、明治天皇の不例から崩御までの経過と、大喪儀に関する史料が収められています。また、そのうち主要な文書は、『日本外交文書』第45巻（明治45年）第一冊に採録されています。

明治天皇は、1912年（明治45年）7月30日午前0時43分に崩御し、大喪儀は1912年（大正元年）9月13日に東京・青山練兵場内の葬場殿で行われました。この儀式には各国元首の名代、特派大使、特派使節が参列しており、その中、イギリスからはコンノート親王（Prince Arthur of Connaught）、ドイツからは皇弟ハインリヒ親王（Prince Heinrich）が、それぞれ国王の名代として特派されています。また、スペインは当初駐日公使が参列することになっていましたが、日本の皇室に対し最高の敬意と同情を表明するためとして、急遽国王の従兄弟であるアルフォンソ親王（Prince Alfonso）が派遣されました。大喪儀の後、コンノート親王とハインリヒ親王には菊花章頸飾が、アルフォンソ親王には大勲位菊花大綬章が贈られています。

Question 9

大正期にヨーロッパを外遊した裕仁皇太子（後の昭和天皇）が、エジプトにも立ち寄ったというのは本当ですか。

Answer

本当です。

裕仁皇太子の渡欧は、イギリス王室訪問を主目的として、原敬首相や、山県有朋・松方正義・西園寺公望ら元老が推進したものでした。宮内省御用掛であった珍田捨巳（ちんだ・すてみ）を長とする14名（後に15名）の供奉員と、語学の堪能な閑院宮載仁（かんいんのみや・ことひと）親王が随伴し、1921年（大正10年）3月3日に横浜を出港、香港、シンガポール、コロンボに寄港した後、4月15日、エジプト（当時はイギリス領）のポートサイドに到着しました。

同年4月18日カイロに入った皇太子は、現地イギリス総督の案内でピラミッドを見物し、翌日は宮殿でスルタン（国王）と会見しています。

裕仁皇太子訪欧については、外務省記録「皇太子裕仁親王殿下御渡欧一件」として関係文書が残っているほか、外務省百年史編纂委員会編『外務省の百年』上巻にも経緯が書かれています。また、関係文書のうち主要なものは、『日本外交文書』大正10年第一冊上巻に採録されています。

昭和戦前期

Question 10

日本の在中国公使館が大使館に昇格した経緯に関する史料はありますか。

Answer

外務省記録「在支帝国公館関係雑件 格式変更関係 昇格関係 公使館ノ部」などに関連記録が含まれており、そのうち主要な文書については、『日本外交文書』昭和期Ⅱ第一部第四巻に採録されています。

日本は、清国時代の1873年（明治6年）に山田顕義を初代特命全権公使に任命して以来、中国に公使館を設置していました。1935年（昭和10年）、日中国交改善に向けた機運が生じると、日本政府は同年5月7日、須磨彌吉郎南京総領事を通じて中国側に日本公使館の大使館昇格決定を通報するとともに、中国側も同様の措置をとるよう要請しました。これに対して中国側は、日本側の決定に謝意を示して同時昇格の準備を整えると回答し、両国政府は新聞に同時昇格を発表することで合意しました。こうして、日中間の大使館同時昇格が実現し、日本側の初代大使には有吉明公使が、中国側においては蔣作賓駐日公使が初代大使に昇格しました。

Question 11

1935年（昭和10年）に日本の経済使節団がブラジルを訪問し、翌年にはブラジルの経済使節団が来日したそうですが、それらの記録はありますか。

Answer

外務省記録「本邦人ノ海外視察旅行関係雑件（中国及満州国ヲ除ク） 視察団ノ部 訪伯経済使節団関係」および「外国人渡来関係雑件 視察団ノ部 伯国経済使節団関係」（伯国＝ブラジル）があります。また、『日本外交文書』（昭和期Ⅱ第二部第四巻・第五巻）にも関係文書が採録されています。

1935年ブラジルに派遣された日本の経済使節団は、川崎造船社長の平生鈆三郎（ひらお・はちさぶろう）を団長とし、両国の親善や経済関係の促進を目的とするものでした。使節団はブラジル各所を視察して現地での交流に努めるとともに、両国貿易均衡のためのブラジルからの綿輸入措置などについて同国外務省と協議し、通商に関する各種勧告、決議、宣言を採択して帰国しました。平生はこの経験に基づき、帰国後の1935年12月5日、昭和天皇に日伯貿易に関する御進講を行っています。また翌1936年（昭和11年）には、訪伯使節団への答礼としてブラジルからも使節団が来日し、巡遊した日本各地で歓迎を受けました。

Question 12

昭和戦前期にイエメンの王子が来日した時の記録を探しています。

Answer

外務省記録「各国名士ノ本邦訪問関係雑件「イエーメン」国人ノ部」に関係記録が収められています。

1938年（昭和13年）5月、東京の代々木に完成したイスラム教寺院の落成式典に参列するため、イエメンから国王の代理として第三王子フセイン（Prince Seif el-Islam el-Hussein）が来日しました。当時日本とイエメンとの間には基本的な条約関係はありませんでしたが、日本政府は、対イギリス・対ソ連政策との関連でもイスラム教国との友好関係が緊要であるとの見地から、フセイン王子一行を政府の賓客として接遇しました。

日本滞在中、王子は各地を視察するとともに、1938年6月の宇垣一成外務大臣をはじめ要人と精力的に会見し、日本とイエメンの国交親善に尽くしました。

フセイン王子は、1939年（昭和14年）1月に日本を去りました。その後、パレスチナでの会議に出席するためエジプトに滞在していたフセイン王子は、表敬に訪れた横山正幸駐エジプト公使に対し、「日本ノコトハ一生忘れ難シ」と、訪日の感想を述べています。

Question 13

太平洋戦争末期、バチカンで太平洋戦争を終戦に導こうとする工作があったというのは本当ですか？

Answer

本当です。

1945年（昭和20年）5月、バチカンのローマ法王庁ヴァニヨッチ（Vagnozzi）司教は、日本公使館囑託の富沢孝彦師に対して、「一米人」より和平問題について日本側と接触するための橋渡しをしてほしいとの申し出があったと明かしました。この申し出の内容は、ソ連の極東進出への警戒感から、米国側が日本に複数の休戦条件を提示しているというものでした。原田健駐バチカン公使はこれに対し、素性・目的とも明確でない人物とこのような交渉を行うことはできないとの観点から、消極的な回答を先方に伝えました。この回答を受けた「一米人」は、再度ヴァニヨッチを通じて、今後日本側から米国側に伝達希望があれば取り次ぐ準備があることなどを伝えてきただけで、その後具体的な交渉にはつながりませんでした。

この終戦工作については、外務省記録「大東亜戦争関係一件 「スウェーデン」、「スイス」、「バチカン」等ニ於ケル終戦工作関係」に関連記録が収められています。また、アジア歴史資料センターのホームページ（<http://www.jacar.go.jp/>）からもご覧いただけます。

昭和戦後期

Question 14

「終戦連絡中央事務局」の業務について教えてください。

Answer

終戦連絡中央事務局（終連）は、占領期にGHQと日本政府との連絡を担った機関です。連合軍最高司令官より示された中央連絡機関設置の要求に応じて、1945年（昭和20年）8月26日、外務省の外局として東京都芝区田村町（当時）に設けられました。初代長官には終戦時外務省調査局長であった岡崎勝男が任命され、その統括の下に4部が置かれました。設置当初それぞれの部では、総務、軍事・政治その他連合軍に対する通信便宜供与、賠償・経済的調整、俘虜抑留者、といった事項が取り扱われていました。

終連の業務は占領政策の進展とともに複雑化し、内閣直属の行政機関が新設・拡充されるに伴い、それらの機関に分掌または移管されるようになりました。そして、外務省の外局としての終連は、1948年（昭和23年）1月31日の「連絡調整事務局臨時設置法」施行により廃止されました。

終連に関係する文書は、第1回～第3回外交記録公開で公開された記録の中に多数含まれ、第3回外交記録公開中には、外務省記録「終戦連絡各省委員会議事録」や、同「執務報告」綴「終連の部」など、終戦連絡事務の概要を示す記録があります。また、それらの記録は、外務省ホームページ内の「外交記録公開文書検索」のページからご覧いただけます。

Question 15

1960年（昭和35年）には、日米修好通商百周年を記念した行事が開催されたそうですが、その経緯について教えてください。

Answer

1860年5月23日（万延元年4月3日）、新見正興（しんみ・まさおき）を正使とする幕府の遣米使節はアメリカ国務省を訪れ、日米修好通商条約批准書の交換を行いました。1960年は、それからちょうど100年にあたることから、日米修好通商百周年記念として日米両国でさまざまな祝賀行事が開催されました。同年5月には吉田茂元首相が民間の遣米使節団の団長としてアメリカ諸都市を訪問し、100年前に新見ら遣米使節団を迎えたのと同じ会場で開催された正式午餐会に出席しました。また、9月には皇太子、同妃両殿下が訪米し、アイゼンハワー大統領とも会見しています。これらに関する記録は、第14回および第17回外交記録公開で公開された外務省記録「皇太子同妃殿下御訪米関係一件」、「日米修好通商百年祭関係一件」に収められています。

なお、日米修好通商百周年記念の一環として、アイゼンハワー大統領の日本訪問も計画されましたが、日米安保条約改定をめぐる国内情勢を受けて、実現には至りませんでした。

Question 16

1962 年（昭和 37 年）に池田勇人首相がヨーロッパ各国を訪問した際の記録はありますか？

Answer

第 14 回外交記録公開で公開された外務省記録「池田総理欧州訪問関係一件」に関連記録があります。

1962 年 11 月のヨーロッパ歴訪で、池田勇人首相はアデナウアー（Konrad Adenauer）西独首相やド・ゴール（Charles A. J. M. de Gaulle）仏大統領らとの間で積極的な首脳外交を展開しました。ここで池田首相は、自由主義陣営が緊密に提携して共産主義に対する勢力を強化することが不可欠であるとの自説を強調して日本とヨーロッパの連携の意義を説きました。



池田勇人

こうした国際政治の話題に加えて、池田首相が強く訴えたテーマが経済問題でした。EEC（ヨーロッパ経済共同体）を中心とするヨーロッパでの経済統合の動きについて池田首相は、EECが自由貿易体制と背馳したものとならないよう、各国首脳に要望しています。また、日本政府のかねてよりの希望であったOECD加盟について各国首脳から支持を得られたことは、この外遊の大きな成果とされています。